

関西民放クラブだより

テレビカメラの画質改善に奮闘

植田 譲二(ABC)

『心に残る 美空ひばり名曲物語』を美しい画像で楽しみました。

ひばりの歌声を聞くにつけ、激動の経済発展を遂げた昭和の時代が走馬灯のように蘇って来ると同時に、我々のテレビ画質向上の努力も蘇ってきました。

私が就職した昭和32年には、すでにアイコノスコープからイメージオルシコンの時代に入っていました。この撮像管の調整は厄介なものでしたが、光量に対して寛容度が大きく非常に使いやすい撮像管でした。新年番組で東京・大阪の財界のテレビでの新年名刺交換会の番組がありました。東京の財界の方のモーニングは黒くてモーニングらしいが、大阪の財界の方のそれは白っぽいと言われ、翌年から放送の前日大晦日に東阪でカメラのトーン合わせをした次第でした。まだVTRがなく生放送でした。『びっくり捕り物帳』で森光子さんが演じる「おたえさん」が涙ぐむシーンで目薬を差すところを出してしまったり、セットの襖

が倒れたり失敗の連続でした。大宅壮一氏がテレビを電気紙芝居と評しました。しかし視聴者はテレビを愛してくれました。

スイツチャーが番組のタイトルからコマージュ・すべてを切り替えていましたから大変でした。タイムキーパーもまだなく番組の出来具合はスイツチャーに負うところが大きい時代でした。

このイメージオルシコンはカラー化の初期の頃まで愛用されました。この撮像管の価格は非常に高価で、初任給1万2000円の当時、この撮像管1本60万円、高感度のものは120万円でした。当時フォードの車が120万円の時代です。

東京オリンピックではNHKが重量100数十キログラムのイメージオルシコンカラーカメラで中継。我々はこのカラー画像に見入りました。しかしまだ家庭には受像機が普及していきませんでした。

その頃オランダのフリップス社製のプランビコンを使ったPC60型カラーカメラが登場しました。私はTBSの夜のショー番組

でこの映像に接し、黒がしまった美しい映像に圧倒されました。

カラー化が遅々として進まなかった時代でしたが、イメージオルシコンからプランビコンに代わっていききました。しかしイメージオルシコンの良さから離れることができずに遅れた大きな局もありました。カラー化にはこのフリップスのカメラの貢献が大きかったと思っています。

カラー画像はしっかりと輝度信号に水彩画のような色を乗せたようなものであるから、輝度信号が重要である。赤・緑・青以外に輝度信号を作る撮像管を追加した4管式のカメラをGE社が提案しました。迷いました。シンプルながら3管式が勝ちました。

私共のカラー化は『てなもんや三度笠』で始まりました。メーク、セット、照明・・・をどうするのか？ てんやわんやでスタートしたのが思い出されます。このプランビコンが小型化されハンディーカメラが出現し、小型VTRとの組み合わせでENGやドラマのロケーション化が始まりました。番組の制作手法も大きく変わりました。EDTVにも挑戦しましたが大きな改善にはなりませんでした。

アナログTVではNTSCの信号を作るためのフィルタ、メガ帯域に収めるための送信機でのフィルタ、これらが画質に大きなダメージを与えていました。

HDTVが出現してきました。当時の画像を家庭に届ける手段は衛星を使ってNHKが開発したミューズ方式のみでした。私共もCSを使って夏の甲子園の高校野球のHDTV画像を全国に配信しました。機材は非常に高価でカメラ、VTR、受信設備どれも3,000万円単位で、しかも大型でした。夏の非常に暑い中、甲子園にブラック小屋を建て悪環境でこの実験を繰り返しました。当時世界でテレビ画像の高画質化の動きがあり、ドイツの委員会が甲子園に視察に来ました。この委員からの質問の一つに「画質が素晴らしい。しかしこの悪環境でオペレーションしている人はどの国から雇っているのか？」ヨーロッパとの違いを知らされました。

映像のデジタル技術が進み、デジタルの送信技術が進んで、また受信機メーカーの大きな努力で、今や美しい画像が家庭に届けられています。夢のようです。しかし残念なことに私の目は衰えてきています。